パネルディスカッション

２氏の講演に続き、ひろしまＲＴ（ロボットテクノロジー）イノベーションフォーラムの鵜野俊雄代表、ひろしま産業振興機構の光本和臣副理事長、三宅の三宅正光社長の３氏によるパネルディスカッションを行った（コーディネーター曽根洋一・日刊工業新聞取締役西日本担当）。リレーシンポのテーマである国際競争時代に勝ち残る日本のモノづくりについて意見交換した。

パネリスト

ひろしまＲＴイノベーションフォーラム代表	鵜野　俊雄氏
ひろしま産業振興機構副理事長	光本　和臣氏
三宅社長	三宅　正光氏

◆コーディネーター
日刊工業新聞社取締役西日本担当　曽根洋一

国際競争時代に勝ち残る日本のモノづくり

「何を作るか」を重視すべき　三宅氏

三宅氏

曽根　三宅はドイツ企業にも技術提供しています。グローバル市場で存在感を発揮できた理由は何ですか。

三宅　ニッチなマーケットだということと、米国では1社ほぼ独占状態のマーケットということで生産技術のイノベーションが起きなかったため、我々にもチャンスがあった。中小企業にしては多額の投資をして世界特許を取得した。そこへドイツの印刷会社が特許を買いに来た。丸ごと買いたいというオファーがあったが断った。だが欧米での製造販売権を認めて技術提供もし、アジアとヨーロッパで米国のライバル社を挟み撃ちすることにした。ところがライセンス締結から4年目に、ドイツの会社が米国社を買収。ライセンス契約時に、M&A（合併・買収）によるロイヤルティーの廃止を盛り込まなかったため依然としてロイヤルティーを払ってもらっている。お客さまでありライバルという複雑な関係だ。とはいえ400億円規模の企業と契約できた。特許の重要性は高いと実感している。

タグビジネスは8合目までできているので、あとは販売に注力するのみ。あと2件ほど開発案件がある。一つは万引防止システム。小売業はゲートをつけても万引によるロスが多く、売り上げの1割が失われている。顔認証を装備し、常習性のある万引犯が入店した際にスタッフに通報するシステムだ。11月の商談会で1社契約が決まった。3月に流通大手に設置する予定だ。もう一つは畜産の健康状態をリアルタイムで把握するシステムの開発を進めている。広島県の畜産技術センターとの共同開発で、顔認証技術を生かして反すう咀嚼のリズムを研究し、牛などの健康状態の判断に役立てる。いわば万引防止技術のヨコ展開だ。畜産業界は人材難で需要があると見ており、これからビジネスモデルを作成する。

曽根　日本のモノづくりは世界の宝ですが、量産品は発展途上国の追い上げをうけています。日本のモノづくりがグローバル市場で勝ち残るのに必要なことは。

鵜野　ロボットしかないのではないか。ロボットを工業用に製造し、農業用に転用するなどの広がりがある。中小でシステム構築が困難であれば、システムインテグレーターの会社が提供していく。そこでできたロボットシステムを海外に売るというのが一つの道だと考えている。

光本　日本の経済はこれまで欧米に依存してきた。それを積み重ねることで発展してきたが、今や経済のグローバル化は大きな転換期に来ている。新興国をターゲットにした経済に切り替えざるを得ない。バリューゾーンを狙うのもひとつの手だが、いずれ新興国がシェアを奪いに来る。国内市場を見ると良い意味での島国という特性があった。国内の消費者が求める水準の高い製品に応じ、技術が発展してきたところもある。技術の水準を上げることは国内で十分できるだろう。だが輸出競争力に強いモノづくり産業を伸ばす必要がある。例えばロボット。海外でできるものもあるが国内で作るような精密な技術は海外ではあまりない。産業集積の実績など優秀な人材の供給源を考えれば新たな事業展開は可能だ。環境関連は今後伸びる。新たな課題にも果敢に取り組むべきだ。

三宅　中小企業はパワーゲームには太刀打ちできないので、どうやって作るかではなく、何を作るかを重視するべきだ。どんな付加価値を製品につけるか、どうやって守るかを考えていく。知恵をとことん絞り抜いて追求していけば中小企業も生き残っていけるはずだ。

ロボットを日本のお家芸に　鵜野氏

鵜野氏

曽根　まずはそれぞれの自己紹介からお願いします。

鵜野　私が会長を務めるヒロテックは、マツダ向けのドアや金型、マフラーを手がけている。同社のドア、マフラーは100％当社が手がけた製品だ。

光本　企業の国際展開支援のほか、ビジネスプランの作成、ベンチャー交流サロン、専門家などの派遣を手がけている。なかでも価値創造の観点からベンチャー支援センターを設置するなど人材育成に力を入れている。上海に事務所を設置するなど海外展開も進めている。

三宅　縫い針メーカーとして創業した。針よりも成長が見込める事業をと考え、印刷事業を立ち上げた。20年間は専業でやっていたが、印刷はあくまでも受注産業。印刷技術を応用した事業に転換しようと考え、セキュリティーラベルの製造販売に行き着いた。

曽根　このほど日本の国内総生産（GDP）は世界3位に後退しました。モノづくりについても節目に来ているようです。現状についてどうお考えですか。

光本　相談が増えているのは、資金繰りや海外への展開など円高の中でどのようにモノづくりを続けていくかということ。アンケート結果でも、国際的なビジネスをしたいとの回答が出ている。三つのパターンがある。まず既存の事業で何とか生き残りたいパターン。これはある面では取っつきやすい。次に新興国をなんとか取り込みたいという考え方。バリューゾーンを今ある製品で取りこみたいということだ。最後に全く新たな事業展開をできないかと考えているタイプだ。

三宅　広島の産業界はかつて、たたら製鉄で日本のシェア50％を占めていた。鉄のやすりやいかりなど半端物を使った産業が発展するなど製鉄過程の周辺技術が伸びた。戦後は瀬戸内海の埋め立てをしながら産業構造の転換を図ってきた。その都度みんなでいろんな知恵を出した。そういう「和」を持って生き残っていく可能性はあるのではないか。お金はないが知恵は出すことができる。

鵜野　今の製造業の課題として、グローバルな展開をしなければならない。それは運命だと感じる。小さな国は最初からグローバルな展開をやっている。スイスはほとんどが中小企業だが、優秀な技術を持っている。シンガポールは10年前から外資を取り入れてきた。

また例えばロボットは100年では無理かもしれないが、人間に近いところまでいくと思っている。手も千手観音のようになり、顔も三面菩薩になる。そう考えるとものすごく楽しいものになる。今、人間がやっている産業は全部できる可能性がある。質的にも人的にも幅は広がるはずだ。

曽根　今後、何をすべきなのか。それぞれの立場からご意見いただきたい。これから少子高齢化は避けていけないところです。GDPを上げるには生産性を上げる必要があります。そういった意味で産業用ロボットの技術は国際競争を勝ち抜いて行く重要なカギだと考えて良いのですか。

鵜野　ロボットの完成体を作れというのは難しい。手をください、腕をくださいといった形で進めるのが最適ではないか。残念ながら産業用ロボットは頭打ちの状況。これからは要素モジュールを大学やベンチャーが製造し、工作機械や設備などにロボットを組み込み専用の製品を作り上げていく。ロボットと周辺技術をうまく開発すれば24時間365日稼働できるラインが作れる。成功すれば、ロボットは日本のお家芸になっていくはず。そのためには企業がロボットメーカーとのウィンウィンの関係を作りあげる必要がある。生産性を高めるロボットは研究開発に投資する価値がある。ロボットの今後の見通しは明るい。

環境関連など新たな挑戦も　光本氏

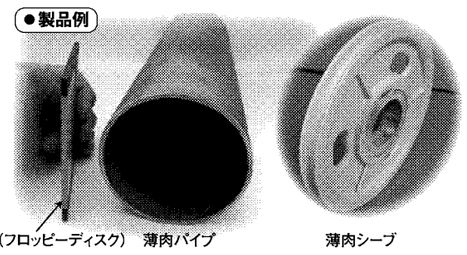
光本氏

曽根　昨年広島県は、インド・タミルナドゥ州と覚書を交わしました。海外との交流は広島のモノづくりにどう反映させるのですか。

光本　インドに着目したのは会員企業などへのアンケートの結果を元に、今後新興国へ展開をしたいという声が圧倒的に多かったため。さらに中国やインドだけでなくベトナム、ラオスをターゲットにしたいという企業がかなりあった。そこでひろしま産業振興機構は、07年と08年にインドに向けて研修団を派遣した。その結果を踏まえてビジネスチャンスを探っていた矢先、広島県から商談会の委託を受けた。中国経済産業局や広島県からも参加し、計53名の大きなミッションになった。タミルナドゥ州と広島県の間で協力協定（MOU）を結んだ。食品と環境関連との商談会を開いた結果、環境関連2社からリサイクルプラントの具体的なオファーがあった。具体的な話が進んでいる企業もあれば、進出したいという企業もある。我々は側方支援しながら中小企業の技術力を最大限に生かすという観点から次へつなげたい。

グローバル社会で困難な課題に挑戦し続ける

製鉄機械から食品機械まで
時代を担う信頼の技術。
<事業内容>
製鉄機械　産業機械設計・製作
各種製鉄用ロール　建設機械（ショベル部品）
船舶用機器　リゾート事業
株式会社 江波工作所　http://www.ebakou.co.jp
本社工場　〒734-0013 広島市南区出島2丁目11-21　TEL082-251-9245　FAX082-251-7490
能美工場　〒737-2311 江田島市沖美町岡大王2500-18　TEL0823-45-3232　FAX0823-45-3233

アーク精錬（特許）による
薄肉ダクタイル鋳鉄製品
肉厚2㎜まで製造可能
アルミ・樹脂からの代替で大幅なコストダウンとなり薄肉化でアルミ・樹脂と同等な軽量を実現します。
●製品例


株式会社 木下製作所　〒732-0802 広島県広島市南区大洲4-11-39　TEL 082-285-2121 FAX 082-285-3071
URL：http://www7.ocn.ne.jp/~ksworks/　e-mail：kinowrks@mint.ocn.ne.jp

わたしたち中電工は、
お客さまに快適生活をお届けします。

中電工 CHUDENKO　0120-060-433（受付時間 平日8:30～17:00 中国5県全域（小豆島を含む））
http://www.chudenko.co.jp

Energia
中国電力は、電気を通して
快適な暮らしをお届けします。
中国電力株式会社
http://www.energia.co.jp/

日刊工業新聞 広島の歩み（1951～）

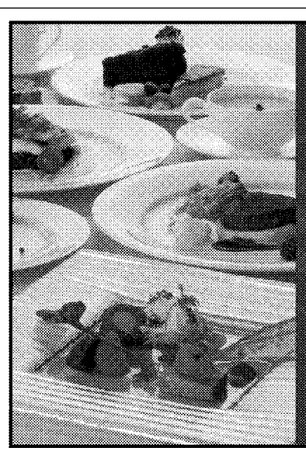
1951（昭和26）年3月15日に広島支局（現広島総局）を開設。当初は東洋工業（現マツダ）に近い安芸郡海田町に事務所を構えた。

マツダの2代目社長・松田恒次は「一般紙は個人が家庭で読めばいい、会社の費用で読むのは専門紙だ」が持論で、どの新聞にも増して多くの社員に弊紙を読ませていたという逸話が残っている。

昭和30年代にはネットワークの充実を図るため、岡山・松江・福山などに取材拠点を設け、その司令塔としての役割を強化した。

1983（昭和58）年には異業種交流を目的にした中・四国工業人クラブ（現中国四国産業人クラブ）が発足。工場見学などのイベントが充実していたこともあり、会員数はすぐに3桁へ届く程の人気クラブとなる。

2003年（平成15）年に現在地の広島市中区幟町へ事務所を移転するとともに、名称を広島総局に変更し現在に至る。

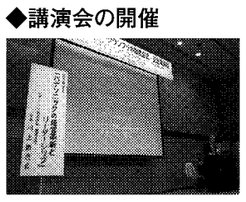

ANA CROWNE PLAZA HIROSHIMA
火曜のランチはレディースデー♪
毎週火曜日のランチは女性４名様につき１名様が無料!!
◎2011年３月～９月の火曜日ランチタイム限定
＊ただし５月３日は対象外となります。
◎飲物は対象外、その他優待との併用不可
対象レストラン
1F カジュアルダイニング フリュティエ
5F 日本料理 臺海
5F 中国料理 桃李
22F レストラン&バー ル・プラティーヌ
別棟1F 鉄板焼 愛宕
ANAクラウンプラザホテル広島
〒730-0037 広島市中区中町 7-20
TEL：082-241-1111
www.anacrowneplaza-hiroshima.jp

異業種との交流・情報交換に役立つ

中国四国産業人クラブは、産業人の情報交換や相互啓発を目的にスタートした異業種交流組織です。

会員の業種は多岐にわたり、規模も大手から中小企業まで幅広いのが特徴です。

◆見学会・研修会の開催

◆講演会の開催


◆海外産業視察研修団派遣

お申し込み・お問い合わせ先
中国四国産業人クラブ　〒730-0016　広島市中区幟町13-11 日刊工業新聞社 広島総局内
TEL 082-511-7111　FAX 082-511-7117